

防衛大学校

Vol.23, No.2

# 図書館だより

National Defense Academy Library Bulletin

2009. 3. 1

主な内容	頁
教官著書の紹介 ……………安全保障・危機管理教育センター 太田文雄 ……	(373)
教官推薦著書の紹介 ……………体育学教育室 入江史郎 ……	(375)
教官推薦著書の紹介 ……………戦略教育室 川中敬一 ……	(366)
卒業にあたって ……………本科4学年(53期) 小久江真門 ……	(367)
地下展示品の紹介……………	(369)

## ~~~~~ 教官著書の紹介 ~~~~~

### 『日本人は戦略・情報に疎いのか』

所 属

防衛大学校防衛学教育学群

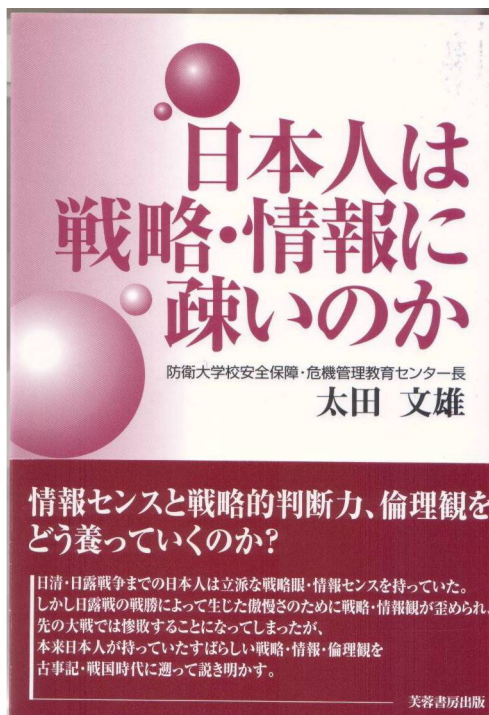
著 者

安全保障・危機管理教育センター

教授 太田文雄

芙蓉書房出版(2008年)

情報本部長として退官した2005年に『「情報」と国家戦略』を、翌2006年には英文の『The U.S.-Japan Alliance in the 21st Century』を、昨2007年には『インテリジェンスと国際情勢分析』を、そして2008年1月に、この『日本人は戦略・情報に疎いのか』を出版しました。英文の本を除き出版社は全



て芙蓉書房で価格は1800円＋税、表紙のデザインは同じですが色が、緑、青、紫と変化していています。

最近とみに増している我が国周辺の安全保障環境の厳しさからか、近頃「情報」とか「戦略」といった言葉が人々の口に上ることが多くなってきました。その言葉が出るたびに、日本人は情報戦で敗北した先の大戦の教訓を何故生かせないのだろうか、またどうして、こう日本人は戦略的発想に乏しいのだろうか、といった嘆きとも諦めともつかないような溜息が聞こえてきます。実は私もかつては、その一人でありました。

しかし日本の歴史を調べ、我々の祖先が行ってきた足跡を辿ってみると、必ずしもそうとは言えないのではないか、という気持ちになって書いたのが本書です。従って「一般的に島国に住んでいる農耕民族の日本人は国際情勢に疎く戦略的思考も乏しい」といったこれまでの定説を覆し、古事記から日本古戦史を紐解いて「そんなことはない」ということを立証した新たな視点を提供しています。

少なくとも日本人は日清・日露戦争までは戦略眼にしても情報センスにしても相当立派なものを持っていた筈です。それが何故先の大戦に見られるように見るも無惨なことになったのでしょうか？そこには日露戦争後の戦勝に驕り高ぶった精神的弛緩や武人としての倫理観が劣化していったのではないだろうか？と最終章は武人の倫理観についても考察してみました。

終戦までは金甌無欠<sup>きんおうむけつ</sup>という古い中国の言葉に寄りかかって、何から何まで日本の歴史を美化して語る人が多かったのに対し、戦後は逆に進歩という欧米概念の下で、何から何まで日本の過去を貶そうとする傾向が、学界・論壇・教育界で多いように思われます。何れも真実に背いた考え方でしょう。

本書では、日露戦争の戦勝によって生じた傲慢さのために、それまで健全であった戦略・情報観が歪められてきたと書きましたが、逆に第二次大戦後は全く自信を失ってしまい、戦略的発想ができなくなっているように

思われます。

さて伝統的な国家対国家の戦いの時代において、戦略的思考を必要とする人は、トップの極限られた人達だったでしょう。しかし非国家であるテロリストやゲリラを相手にするときは、中隊長レベルから、情報のセンスと戦機を見据えた戦略的判断力、そして倫理観を養っていないと、常に上司に判断を委ねていては間に合わない時代になっています。

否、戦闘員個人のレベルに至るまで適切な情報・戦略眼を持っていなければならないかも知れません。例えば2007年秋に生じたミャンマーの暴動に際し、日本人カメラマンが射殺される事案がありましたが、その状況のテレビ放映が日本はおろか全世界を駆け巡るに至って、一兵士のとった行動によりミャンマー政府はどれだけ戦略的な損失を被ったかも知れません。これからの兵士はただ「撃てと言われたから撃った」だけではすまされない時代にきており、特に将来益々増勢が見込まれる特殊部隊は政治目的達成のための部隊ですので、こうした配慮が決定的に重要となってきます。

従って戦略や情報の実務に携わる人達は、同じ日本人が残した見事な戦略・情報眼の足跡を追体験することにより、自己の能力を高めることに繋げてほしいと願っています。現代は一人一人が楠公、信長、秀吉のような創造力豊かな発想が求められている時代となってきたと言えるでしょう。

今日では、日本の国家としての品格を問うような書物がベストセラーになったり、多くの日本人論が世に出たり、また「日本らしさ」についての検討も始まりました。本書がそうした議論に一石を投じることができれば幸いです。

本書は、これまでの著書の中では最も一般社会に受け入れられやすく、かつチャレンジングな内容となっています。本来日本人が持っている実力・能力に気付かず、自虐的になっている国民に大きな勇気を与えることができれば幸いです。

〜〜〜〜〜〜 教官推薦著書の紹介 〜〜〜〜〜

『組織不正の心理学』



編 著

蘭 千 尋・河 野 哲 也

編集及び紹介

体育学教育室

准教授 入 江 史 郎

慶応義塾大学出版会（2007）

著者の蘭氏、河野氏は数年前まで、防衛大学校で哲学・倫理学・心理学の分野で教鞭をとられていた。現在はそれぞれ千葉大学、立教大学に移られたが、組織の倫理に関する研究を続けておられ、本書も倫理的な組織運営や教育方法について貴重な示唆に富むものである。

この本の構成は以下の通りである。

第1章は「組織倫理とコミュニケーション」。倫理学の基本的な問題を論じながら倫理とコミュニケーションに深い内的な関係性があることを示す理論編である。タテ型組織で閉鎖的、派閥主義が横行、規則や法律よりも上下関係が重視されるといった組織で問題が生まれやすいことが指摘されている。

第2章では「組織不祥事の心理」として、視聴率をめぐるテレビ局で生じた不祥事発生のメカニズムを具体的事例として取り上げている。

第3章および第4章では、不祥事が起こった後の対応のあり方として「危機管理とマスメディア対応」「医療現場のクライシス・コミュニケーション」をとりあげている。特にこの第4章においては、「信頼できる組織づくりのために」として次の4点をあげている。(1)説明責任を果たし、情報開示すること。(2)外部監査・審査を実施し、外部の視点を取り

官民間問わず、毎日のように報道される様々な組織の不祥事。そこで不正に手を染めた人々は、意外にも個人としては、真面目な人であったり良き家庭人であったりする。このことは、個人として真面目な人間であっても、組織として倫理が正しく確立されていなければ葛藤を生じ、結果として組織の都合を優先させてしまう場合があることをあらわしている。

あるいは本人は自覚のないままに不正に手を貸していたという例も耳にする。

したがって、組織的不正や不祥事を未然に防止するには、組織そのものを、健全で、誠実なものにするような運営が行われなければならない。

しかしながら、不祥事が起こるたびに出される遵法指令や倫理研修など従来の「指令型の教育」は効果が薄いことも最近知られてきている。

それでは、どうすれば倫理的な組織運営は可能になるのでしょうか？

込み客観的な自己点検をすること。(3)組織の目的、ルール、指令の明文化。(4)組織内で地位の上下を問わない意志交換の場を定期的に関き、双方向コミュニケーションを行うこと。

第5章では、「倫理意識向上のための倫理教育プログラムの開発」として、アメリカの教育学・心理学者であるコールバーグの道徳性の発達理論をベースとし、更にその理論を批判的に検討し、大学生以上を対象として開発した倫理意識尺度が示されている。

最終章では「倫理教育とオートポイエーシス」として大学生に対する倫理教育として、アメリカ海兵隊内部で起こった殺人事件を描いた映画『ア・フュー・グッドメン』の視聴と、他者との討論によるコミュニケーションによる倫理意識の変化実践例が示されている。

「あとがき」では、倫理教育の課題として、「“倫理”は相手の立場に立つことが基本であ

るが、その共感すべき相手が見えないままに心の中に社会への不信感を溜めている状態はストレスフルであり、極端に抽象的で視野の狭い“正義感”をもつ孤立者となるか、その反対に、自分を受けとめてくれる集団を闇雲に求めてしまう状態へと逆行するかのどちらか・・・」として、倫理意識や社会意識の獲得が孤立によって得られるという状況の危うさを指摘している。

個人も組織も外部とのコミュニケーションを広く深く持ちながら、自分や組織を見つめなおすことが大切なのである。

組織が高度なモチベーションと倫理性を両立することは可能である。著者は「倫理とは自らを拘束するものではない」「倫理とは自らを作り続けることである。」と述べている。

将来の幹部自衛官になる学生諸君だけでなく、防衛大学校全職員にとっても必読の書と考える。

~~~~~ 教官推薦著書の紹介 ~~~~~

『人民解放軍』

編 著

竹 田 純 一

編集及び紹介

戦略教育室

准教授 川 中 敬 一

ビジネス社（2008）

ご紹介させていただく本書は、永年、中国や米国に駐在し、防衛庁記者クラブでも活動された現NHK報道主査である竹田純一氏によって執筆された。

とかく謎めいた存在との印象を抱かせる中国人民解放軍の全体像を簡潔かつ正確に描き出している点に本書の最大の特徴がある。



その手法は、著者の丹念な中国共産党の公開資料研究に基づく取材活動によるものである。つまり、本書の内容は、極めて根気が要求されるオーソドックスな手法によって、中国人民解放軍の本質に迫っているのである。

こうした意味で、本書は、社会科学であろうが自然科学であろうが、事象・現象を科学的に明らかにすることを求められる本校学生に、研究のあり方を指南してくれるであろう。

さて、本書は、全部で11個章から構成されている。以下、その概要を紹介する。

第1章では、中国の軍事力の全体像が描かれている。その中でも、中国の軍事力の最大の特徴である人民解放軍と人民武装警察そして民兵という「三結合」を要領よく解説している点は、特筆に値する。また、中国の軍事力の概念を表形式にまとめているが、この表は、中国の軍事力の全体像を理解するのに大いに貢献するであろう。

第2章と第3章は、中国の軍事力が共産党の指導を受けるという性格を帯び、その党から部隊への命令系統という中国の軍事力の“頭脳”部分の構造を簡潔に解説している。この党と軍隊との関係は、外部世界の者には理解しづらく、また、中国の軍事力への誤解の根源ともなる問題である。この点を筆者は、正確かつ簡潔に説明しており、本書が“十年間は使用に耐え得る”理由である。

第4章は、筆者がNHK北京支局長時代に培った人脈と研究成果が遺憾なく発揮されている部分である。人民解放軍の7大軍区の任務、特質を解説している点は、中国という世界が“小宇宙”であることを理解させてくれる。

第5章は、筆者が最も力を入れ、そして、自信を持っている箇所である。本章は、基本的な公刊資料と丹念な取材活動とが融合している点に高い評価を与えざるを得ない。その内容は、人民解放軍の人事制度である。この問題は、軍事問題のみならず、中国社会の縮図とも言える。本章を読み進めると、中国という国家が、共産党に指導される中華人民共和国社会であることが理解できる。その意味

で、中国という社会全体を軍事的視点から見つめるという、日本では触れることの難しいアプローチが、本章の最大の価値と言える。

このアプローチは、日本社会全般のみならず、防衛省、自衛隊でも、つい疎かにされがちな問題を読者に思い出させてくれよう。

第6章以降は、各軍種の略史と現状を解説しているが、全般を読み通すことによって、可視的な現状追跡では理解できない人民解放軍の各軍種の本質を本書は提供してくれている。

筆者は、深い学術的素養とマスメディアにおける多年の経験は有しているが、防衛という任務に従事したことはない。しかしながら、自衛隊や防衛省で勤務した者よりも遙かに正確な人民解放軍の全体像を描いてみせている。これは、一重に、筆者の愚直なまでの一次資料研究と丹念な取材活動から得られた健全な視点によるものであると思われる。その意味で、社会科学あるいは自然科学を学ぶ本校学生は、本書を読み通すことで、現象の本質を解き明かすには、竹田氏のような手法を採る必要があると痛感することであろう。

こうした点からも、本書を多くの学生諸官や職員が読まれることを推奨したと思う。



~~~~~ 卒業にあたって ~~~~~

## 4 学年 (53 期) 小 久 江 真 門



4年間お世話になりました防衛大学校を卒業するにあたり、図書館に対して、常日頃思っていた事について述べさせていただきます。

約7年前、私は、陸上自衛隊武山駐屯地内にある少年工科学校に入校しました。

生まれ故郷である静岡の公立中学校で卓球部に所属し、あまり運動をしていなかった私には、そこでの生活・訓練全てがありえない程辛いものでした。そうはいつでも、住めば都という言葉があるように、入校して1年が過ぎるころには、人並みには体力が付き生活も充実したものとなっていました。

少年工科学校の2学年時に、一度だけ防衛大学校を見学する機会があり、全ての施設が少年工科学校より充実しており、図書館の規模も段違いのものでした。

当時の私にとって防大生は、雲の上の様な存在であったため、防衛大学校で勉学に励む自分の姿は想像も出来ないものでした。

しかし、どういふわけか防衛大学校に推薦して頂き、入校させて頂くこととなりました。

当時の私は、読書をするという習慣がなかったため、防大に入校したならば、見学の時に見た図書館に行き、色々な本を読みたいと思っていました。

そして、約4年前私は防衛大学校に入校しました。そこで体験した防大独特の文化・伝統、想像以上に恐ろしかった上級生の方々のおかげで日々の生活に追われ、また、推薦で入学できたおかげで、ほとんど勉強していなかった私には防大の授業はとても難しく、自習時間中は課題や復習に費やされ、読書をするための時間を私は捻出することが出来ませんでした。

それから1年が経ち、2学年になりサッカー訓練も終わると、大分時間に余裕も出てきたのですが、その時間をだらだらと過ごし図書館に行くことも数ヶ月に一度といった様な状態となっていました。図書館に行くのが面

倒になっていた私は、自分の読みたい本があると通販サイトから購入するようになっていました。学生の中でも図書館に行くのが億劫になってしまい、通販サイトを利用して本を購入している学生が多くいると思います。通販は便利です。

しかし、そんな学生に言いたいことがあります。私たちが思っている以上に図書館の蔵書は豊富です。図書館には無いだろうと思って購入した本が、よくよく調べてみると図書館にあり、よく調べておけばよかったと思ったことが何度かあります。あくまで私個人の場合ですが、通販で本を購入していた時は、本の購入費用が月平均で2万円ほどかかっていた。通販サイトを見ていると、自分が購入した本の情報をもとにお勧めの本をピックアップしてくれるサービスがありますが、私の場合は、本来欲しかった本よりもそちらの商品の購入費の方がかかっていたように思います。

何が言いたいかというと、図書館にまめに通うことにより、先に述べたような事態を防ぐことが出来たのではないかとということです。

自分にとって有意義な本に出会うことができ、その上その本を無料で借りることが出来るのです。確かに図書館にはない本の方が世の中に多くあるのですが、まず図書館に行ってみるのが良いのではないのでしょうか。

先程、本の購入費が月2万円かかっていたと述べましたが、図書館に行っていたらそれが1万円になっていたかもしれません。私は、2学年の5月から4学年の6月くらいまで通販で本を購入していたので、もし頻繁に図書館に通っていたのならば、約25万円節約出来たこととなります。卒業前の金銭に余裕が無い時期でも部屋会も対番会も余裕を持って行えます。

後輩の皆にもう一度だけ言いたいと思います。図書館に行きましょう。

事務官の方々は、どうしたら学生のためになる図書館になるか、現状よりも良い図書館になるのかを、いつも考えて下さっています。しかし、事務官の方々だけでは良いアイデアは生まれません、学生の建設的な意見が絶対に必要なものになります。学生が良い意見を出すにはどうしたらよいでしょうか。それは、図書館に行くことです。

図書館に来て、日々利用していかなければ

良い意見は生まれません。時間を自ら作り出し図書館へ足を運びましょう。

最後に空手道部部長でもある村井図書館長、図書館のために日々尽力してくださっている職員の方々に対して深く御礼を申し上げて締め言葉とさせていただきます。

4年間本当にありがとうございました、後輩たちもどうかよろしくお願いいたします。

## ~~~~~ 地下展示品の紹介 ~~~~~

21年2月から、チリ共和国大使館より寄贈されたチリ海軍練習帆船の展示を行っています。展示場所は、地階テラスの研究閲覧個室・集密書庫2エリア入口側です。図書館をご利用の際は、是非お立ち寄り下さい。

### エスメラルダの船歴

エスメラルダ号は、「白い貴婦人」の愛称で親しまれながら、海の親善大使として活躍しているチリ海軍の練習帆船です。

三世は、1894年に日本帝国海軍の海軍力増強に伴い、チリ海軍から譲渡され、艦籍名「和泉」と命名されました。その後、1898年3月21日に北清事変で廈門警備に従事し、日露戦争に際しては、旅順攻略作戦、対馬海峽警備、日本海海戦、樺太作戦に参加。中でも、日本海海戦においてロシア帝国海軍バルチック艦隊と最初に接触し、海戦を有利に導いた功績のある日本の歴史的軍艦であると共にチリ共和国との友好の象徴として名を留めています。

六世となる本船は、1953年5月12日にスペイン(カディス)で進水し、1954年6月15日にチリ政府に引渡されました。その後、チリ海軍の練習帆船として世界中の300以上の港に寄港しています。日本へは、1966年の初入港以来、1983年の大阪国際帆船パレード、1997年の日本チリ修好100周年記念、2002年の海上自衛隊50周年記念観艦式、2007年の日本チリ修好110周年記念などに寄港し、日本とチリの友好関係のシンボルとなっています。



### エスメラルダ性能諸元 (エスメラルダ号六世)

- ・ 全 長 : 113m
- ・ 全 幅 : 13.11m
- ・ 全 高 : 7m
- ・ 柱 長 : 8.7m
- ・ 舷 縁 : 5.3m
- ・ 満 載 排 水 量 : 3,673トン
- ・ 乗 員 : 約300名  
(将校、士官候補生: 約90名)
- ・ 帆 総 面 積 : 2,870m<sup>2</sup>
- ・ 帆 数 : 29
- ・ 檣 長 : 48.5m

---

### 編集後記

今後も本校図書館において、蔵書展示等を実施していく予定ですのでより多く利用者の方々に見学していただけるよう図書館員一同お待ちしております。

編集庶務担当

---

NADAL Bulletin Vol. 23, No. 2  
防衛大学校図書館だより 2008. 9

---

#### 発行所及び発行人

〒239-8686 神奈川県横須賀市走水  
1-10-20

防衛大学校図書館 Tel. 046-841-3810

図書館長 村井友秀

---

#### 編集委員

入江史郎 (体育学教育室)

吉村幸浩 (応用化学科)

講初靖 (国防論教育室)

---

#### 編集庶務

北村孝一 (図書館事務室)

森山伸一 (図書館事務室)

---

#### 印刷所

防衛大学校 図書館事務室

「図書館だより」事務局 出版

---